

真宗敎学における唯識思想について

花 栄

はじめに

曾我量深（以下は曾我⁽¹⁾）・安田理深（以下は安田⁽²⁾）は、浄土真宗において、唯識学を浄土真宗と関連づけて考えた人物である。

曾我は『如来表現の範疇としての三心観』において、『仏説無量寿経』（以下は『大経』）に説かれている、十八願の至心・信樂・欲生の三心を『成唯識論』にある阿頼耶識の三相、自相・果相・因相に該当している。⁽³⁾

この講義は難解であるが、曾我敎学の独自性を生み出し、曾我自身自らの学的基本姿勢を示していると考えられる。

曾我の唯識学について、本多弘之は、唯識により自分の意識の内容として咀嚼していると領解している。⁽⁴⁾

以上のことから、筆者は曾我・安田が、浄土真宗の主體的な受けとめ方を明らかにするために唯識学を選んだと考ええる。しかし、曾我・安田は、『成唯識論』の言葉を「ご自分

の意識の内容として咀嚼していった」ため、そのままでは、筆者には曾我・安田の言葉が領解しづらい場合もある。

そこで、本論では曾我・安田の言葉をどのように領解していくべきか考察していきたい。その手掛かりとして、曾我・安田の唯識観を踏まえ、曾我の「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」という視点から『大経』の法蔵菩薩の物語を『成唯識論』の阿頼耶識説とどうかかわりあったのかを考察する。

一 曾我・安田の唯識観

（一）曾我の唯識観

曾我における唯識学を語るとき欠かせないのが、一九二五年「如来表現の範疇としての三心観⁽⁵⁾」という講義である。

「如来表現の範疇としての三心観」には、

先づ阿頼耶識は法蔵菩薩である。随って「法蔵菩薩は純真なる宗教的体験である」といふことをはつきり皆様の頭に置いて戴いて、詰り法蔵菩薩が至心信樂欲生の三心の誓を發したまうた、即ち至

心信樂欲生といふものは法蔵菩薩の發起したまへる所の三心である。⁽⁶⁾

と述べている。この部分に対して水島見一は、

「如来よりたまわりたる信心」を、自己内面における法蔵菩薩の実験として具体化した曾我の思想的営為は、近代人に直に訴えかけずに置かないものであった。⁽⁷⁾

と領解している。このように、如来より戴く信心こそ、自己内面における法蔵菩薩の實踐として現代の我々の「生ける信仰」に他ならないのである。曾我の唯識学については、

一般的な真宗学の話をするのでも唯識学の話をするのでもない。自分は現在の自分の意識の事実の話をするのである。だから意識の体験を離れたる真宗学でもないし、宗教的認識と交渉なき唯識学でもない。つまり自分の意識の中に流がる、真宗学を話し、自分の宗教的要求の反省なる唯識学の話をして居るのである。⁽⁸⁾

と述べているように、曾我は宗教的体験を法蔵菩薩とし、宗教的人格の自覚の相として現わしていると言える。

如来雄之は曾我のことをまとめて、

曾我に教学における唯識学が、師の学んだ法相唯識の独自性と深い関わりをもっていることは疑いない。しかしそこでなされている教学が法相教学そのままであるかと問えば、断じてそうではない。曾我は唯識学者ではなかったし、同じ意味で真宗学者でもなかった。「生ける信仰」をどこまでも教学として明らかにすることをとめた求道者であった。⁽⁹⁾

真宗教学における唯識思想について（花）

と領解している。

以上のように、「曾我は唯識学者でもない、真宗学者でもなかった」という如来雄之の領解にあるように、曾我は一般的な真宗学でも唯識学でもなく、唯識思想を真宗学に取り入れ、「生ける信仰」を教学として明らかにしたと考えられる。

（二）安田の唯識観

安田は真宗学を学ぶ上に唯識学を選んだ理由に対しては、自覚の学としての真宗学に取って、極めて深い関わりを有っているのが唯識学である。真宗学をして自覚の教学たらしめるものは、大乘仏教といつても、諸法唯識という根本命題をかかげるところの瑜伽教学である。⁽¹⁰⁾

と述べている。安田は真宗学にとって、深いかかわりがあるのは唯識学であるとともに、真宗学の自覚は唯識学であるとし示している。このように、安田は曾我の教えを継承し、曾我教学の根本命題を受け止め、真宗学を一層明らかにしたと考えられる。

安田は唯識学の意義については、

阿頼耶識と法蔵菩薩、この唯識論の教説と『無量寿経』のそれとは、どこまでも独立した教説であるのは勿論だが、その間に呼応するものがある。（中略）両者がその照応によって、両者であった場合にはみられなかったところの、含蓄的に伏在していたわれのわれという一つの意味が叫ばれていたのである。⁽¹¹⁾

真宗教学における唯識思想について(花)

と述べているように、『大経』と『成唯識論』は異なったテキストであるが、両者には呼応するものがあると解釈している。この言葉から「両者がその照応によって、両者であった場合にはみられなかったところの、含蓄的に伏在していたわれのわれという一つの意味」が示されていると考えられる。この「われのわれ」について安田は、

「われのわれ」は却って「われ」を否定して客観的なものに随順せしめるであろう(中略)われは汝を承認することによって我である汝を汝とすることによって我は我となるのである。汝を尊重することによってわれを失うのでなくわれとなるのである。如来というのも汝である。真如を汝とする時真如は如来である。われは真如法性にかない、随って如来に帰依するものである。⁽¹²⁾

とあるように、「われのわれ」とは「どこまでも主體的なるわれではあるが、主體的は客観的に逆いて主体であるのではない、客観を客観と承認することによってよく主体であるのである」という主体を表している。その「われ」が、如来を客体として「汝」と呼ぶ関係を超えて、宗教的主体として仏道を歩むものにおいては、如来がわれとなる不可思議を前提として考えられている。「われのわれ」を通して安田は『大経』と『成唯識論』の根本的主体を明らかにしたのである。

二 真宗学における唯識学の意義

ここまで曾我と安田の唯識観を見てきた。安田が『成唯識論』と『大経』の間に呼応するものがあると述べるように、「われのわれ」という両者の間に通ずるものがある。そして『成唯識論』と『大経』を「生ける信仰」として読んでいったことが示されている。「生ける信仰」として読んでいったということは、どこまでも自らの信仰を主体として、つまり「如来に帰依するもの」として読んでいったということになる。「如来に帰依するもの」として『成唯識論』と『大経』を結びつけて読んだと言える。

こうして曾我が「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」と述べることにについて、

自分は愚直であるものだからして、其の法蔵菩薩といふものの正態を、どうしても自分の意識に求めていかないと満足できない。(中略)又『大無量寿経』ばかり読んで居つても法蔵菩薩が何であるか解らない。『大無量寿経』に説いてある所の法蔵菩薩を『唯識論』の阿頼耶識の中に求め得ることによって、私は『唯識論』の阿頼耶識といふものが即ち法蔵菩薩であるといふことを明らかにしたのである。⁽¹³⁾

とあるように、曾我は『成唯識論』の阿頼耶識を考えるとときに、『大経』にある法蔵菩薩を取り入れ、法蔵菩薩は阿頼耶識であるということを明らかにしたのである。このように、

曾我自身の自覚の学びの徹底において、この根底的な命題を持つ学としての唯識学を選んだと言える。

このことについて、本多弘之は、唯識学の阿頼耶識は『大經』の法蔵菩薩であるということを明確にしたのである。⁽¹⁴⁾

それは、阿頼耶識は誰にでもある、一人ひとりが阿頼耶識を持ち、根本主体である阿頼耶識は『大經』の法蔵菩薩を非神話化し、人間存在のあり方を表していると考えられる。

おわりに

以上曾我・安田の唯識観を踏まえ、真宗学における唯識思想について考察してきた。それは、曾我が、真宗学に唯識学を取り入れることにより、真宗学が「生ける信仰」となり、自覚の教学となることが明らかになった。本論では、曾我と安田が注目した『大經』と『成唯識論』との関係に焦点を当て、曾我の「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」という独自の領解について注目した。この領解は、唯識学を取り入れた曾我の「生ける信仰」による領解であり、その根底には法蔵菩薩の本願があると考えられる。今後、さらに真宗学と唯識学の関係性を検討していき、「生ける信仰」としての真宗学を模索していきたい。

1 曾我は、若いころから『成唯識論』を愛読し、唯識学という

真宗教学における唯識思想について(花)

阿頼耶識思想を取り入れ、親鸞教学の深さを明らかにした。『大經』に説かれている法蔵菩薩は阿頼耶識であるとした。

2 安田は曾我の唯識理解を踏まえ、『唯識三十頌聴記』(福井相応学舎)、「阿頼耶識と法蔵菩薩」『安田理深選集別巻』(文栄堂書店)など唯識思想にかかわる論文が多数ある。

3 『曾我量深選集』五巻・一六〇頁・一九七〇年・彌生書房。
4 本多弘之『静かなる宗教的情熱——師の信を憶念して』一三頁・二〇〇六年・草光舎。

5 「如来表現の範疇としての三心観」は昭和二年(一九二七)五月に真宗教学研究所から刊行された。

6 『曾我量深選集』五巻・一六八頁・一九七〇年・彌生書房。

7 「曾我量深の自覚道(下)」二七頁・『親鸞教学』第九九号・二〇一二年・大谷大学真宗学会。

8 『曾我量深選集』五巻・一六七—一六八頁・一九七〇年・彌生書房。

9 加来雄之「真宗近代教学における唯識学研究」八五頁・『真宗総合研究所紀要』第九号・一九九一年。

10 『安田理深選集』一巻・五二三頁・一九八四年・文栄堂書店。

11 『安田理深選集・別巻一』三九頁・一九九一年・文栄堂書店。

12 『安田理深選集・別巻二』四〇頁・一九九一年・文栄堂書店。

13 『曾我量深選集』五巻・一五七頁・一九七〇年・彌生書房。

14 本多弘之『静かなる宗教的情熱——師の信を憶念して』二六頁・二〇〇六年・草光舎。

〈キーワード〉 阿頼耶識、曾我量深、安田理深

(同朋大学大学院)